



# 神聖かまってちゃんとあらしの朝に

ああ 誇らしくない、絶望のさきへ

そのばん、きつねは、わらって死にました。

ごうごうと、たたきつけてきた雨。それは雨というより、襲いかかるナイフだ。

あれくるった夜のあらしは、鋭いナイフを ちっぽけな きつねのからだに 右から 左から、力まかせにぶつけてくる。

きつねは、やっどのおもいで 壊れかけたちいさな小屋にもぐりこんだ。

くらやみのなかで、きつねはからだ休め、雨が止むのをまつ。

思えば、いつもきつねだけだった。彼だけがときどき降る するどい雨に 敏感だった。



たとえば、ゆうじんの「アオ」は 走るのがすきだった。そらがピカピカ光ってる からだがふる えあがるおとが鳴っても、なんだいこんなもん！とってピューっと風にのる葉っぱのように走っていく。

たとえば、ゆうじんの「グエン」は かんがえることがすきだった。地面がなくなってしまうほ

ど雨がふって山がザーザー崩れても あそこにいればだいじょうぶ といって みんなをひなんさせた。あとから きつねが どうしてだいじょうぶだとおもったの？と きくと、「ムラサキ」はなんとなくそうおもったと、こたえた。

みんなすごい。

もしも ぼくなら 「アオ」のように空がゴーゴー怒っているなかを 走ることができない。でも ぼくだって しんぞうがぶっこわれるくらい 走りたいんだ。「グエン」のように すぐれた ほんだんりよくで みんなから 必要とされてみたい。きつねは こっそり思っていた。

ゴロゴロズズ、ドーンズズー ゴゴゴゴゴ

まだまだ雨はやみそうになかった。

きつねはいつも かんがえる。苦労ばかり おおくて むくわれる 事のすくない人々について かんがえる。くらくしよんのあふれる 雑踏のなかで、身うごきがとれないものについて。腐った木をひろいあつめて、あたまがふたと目がよつつあるにんぎょうをつくっているものについて。

ぎんこう口座には いったい いくらあれば あんしんなのだろう。きつねは いったん 疑問を感じる と 考えこんでしまうのだ。

むかし ある丘にのぼったとき あるおとこにであった。

そのおとこは ぎんこうのいりぐちに 冷やあせをうかべて あたまを地面にたれていた。《まじめに やれって いわれてきて それを しんじて やってきたのに そのみかえりが、この仕打ち。ちゃんと生きていけて… 下をむいて 歩けて いわれているのとおなじことじゃないか。いつも他人を信じて やってきた。だまさずに。うらやまず。なのに、おれは何もかも失ってしまった。このブルーベリーモティアで……。》

「どっかに行ってしまうたい」



ぶふおー ぶふおー

汽車のキテキが鳴っている。むかし あれには おとうとが 乗っていたんだ。おとうとは だいがくから 帰ってきて 実家を 継ぐはずだった。それで おれの 実家しごと も 終わり。やっと だいがくで おおきな 橋を 建てるため 建築の べんきょう を するんだって な。幼いころからの 夢だったんだぜ。その 汽車のキテキが てんしの 声に きこえたよ。いままで きいてきた どんないんぎょ よりも 最高だった。

ああ、シューベルトよりも バッハよりも ブルーススプリングスティーンよりもそれは希望にみちていたんだ。



降りてくる弟を抱きしめたよ。オージーザスって普段いわない言葉でな。

でも弟は恋人をつれてきたんだ。

いやあそれはわるいことじゃあないさ。もちろん素晴らしいことさ。かのじよはとてもいい娘だった。かしこくきてんがきいてしかもブロンドだぜいやそれはおれが『北北西に進路をとれ』の女優がすきなだけなんだがな。

かのじよとはなしをするとおれにこっそりおしえてくれた実家のニューヨークでじぶんの父親の工場が空いているのでそちらに弟をまかせたいっていうんだ。そりやおれの地元じゃそんなおおきい規模のしごとにはありつけないんだぜ。そんないいはなしがあるかい？ いまのご時世。ないね。イエスしかないだろ？

でもおれはどうなるんだベイビー？ そう心のなかでかんがえた。自問自答をしたんだ。おれは4年待った。それだけならまだ我慢できたんだ。じぶんの人生のほんのすこしの遠回りだってな

。

さあ、おれはどうしたと想う？

フツーなら夢を追うだろ。弟をおとしめてでもじぶんの夢をおうべきだったんだ。でもおれのばかな自意識がでちまった。



弟と恋人を送りだすときは汽車のキテキがこんどは絶望の音にきこえたよ。

じぶんで笑っちゃったよ。なにをしているんだろうおれはってな。でもしょうがないさ。自分によって起こるすぐまえの不幸に目をつぶることができるかい。

これはお金の問題じゃないんだぜ。銀行口座にはいってるお金がいくらあろうと関係のないはなしだ。

きつねは男の話をきいていて、よくわからないがとくにかく悲しい話をしているのだということがわかった。

男は電話をとりだした。ボタンを押す指が震えている。どこかにかけているようだ。呼び出し中こう口をひらいた。

「いまは悪い時代だが、もっと悪くなるぜ。」

ビッグイベントにかこつけた再開発はどんな政策よりも有効なんだ。人々がもっているはずの魂。真ん中の意志がすっこんでドーナツみたいなかたちになる。それを美味しくいただく奴らがいるんだ。アパルトヘイトも同じさ。金が支配する世のなかじゃ純粋な魂はいつだって笑いものだぜ。

さあ、おれもほんとうの決断をしようとおもう。弟はげんきにやってるんだ。ときどきこどもとベーグルを食べている写真をよこすんだぜ。

……そうか…どうやら相棒はすでに出ていってしまったらしい。おれたちはブーゲンビリアの木の下で約束してるんだ。それが最後の希望だいまのおれの人生のな。きっと天気の良い午後に会えるだろう…。それでいいんだ。

男は電話を切った。笑っている。

遠く銃声。

さっきまで呼吸してたヒューマニズムが吹っ飛んだ。



きつねはそれからのことを覚えていない。覚えていたけどきのみをみつけたときに忘れた。

それでも男のことはときどき思い出す。そのたびにわからなかったことがわかったり わかりかけていたことがわからなくなったりした。

こんかいはすこしわかった気がした。会っていきなり、泣かせるようなこいはなしをするやつはいないし、はじめはきっと、楽しいはなしをするはずだ。すこし仲良くなったら打ちあけばなしのひとつもするだろう。そしてだんだんマイペースでつきあえるようになるのが、自然な付き合いかなんだろう。ところが、相手にたいしてうまくやろうと思えば思うほど、あたりまえなことがあたりまえにできない。だから、あえて言葉にするのだろう。

それも きっと またわからなくなるんだろうけど。

ナイフのように地面をえぐっていた雨は止みそうになかった。

寝そべっている床の部分だけ きつねのおなかの体温で 温められていた。小屋は外よりもすこし暖かい。ほかのどうぶつがここに来たらもっと暖かいのに するどい雨を感じとるときつねはいつもそう思っていた。

小屋には窓がなく 外のようにすがわからない。きつねは夜空にうかぶ月をみるのが好きだった。でも ここは真っ暗闇。

雨は勢いをましていた。

さあ、ほんとうのけつだんをしよう。

そのばん、きつねは、わらって死にました。

↓

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ